

家具意識に関する研究

—— 家具に関する教育上の課題について ——

A Study on Furniture Consciousness

—— Educational Problems of Furniture ——

中 西 眞 弓

インテリア計画の中で家具は重要な構成要素であり検討課題である。専門知識としてのインテリア教育では家具について触れることも多く、その知識は西欧のものを基準として組み立てられている。しかし、日本では家具についての意識や実際の住まい方が西欧のそれとは大きく異なっている。現状の生活や意識の一端を調べ、また家具の歴史について概観すれば、多くの日本人は、専門知識どころか家具について学ぶ機会が全くないまま、親から子どもへと慣習が伝えられて、古い価値観を持ち続けていることがうかがえる。家具の重要性を伝え、より多くの人が家具についての正しい知識を得ることは、住まいを快適にするだけでなく、健康にも、また日本での家具の発展にも寄与するものと考えられる。

1. はじめに

日本では、結婚に際して新婦が嫁入り道具を持参する伝統があり、最も代表的なものが家具であると言われている^(※1)。そして、その家具の中でも特に収納家具であるタンスを「婚礼タンス」とも呼び、準備する人が多い。リクルート社が結婚情報に関するホームページの中で、「嫁入り道具といえば『タンス』なんて時代もあったけれど、今でもその文化は残っているよ」と記載しているように、現在の若いカップルにおいてさえ、婚礼タンスを結婚に際して購入する習慣が残っている^(※2)。同社による2006年から2008年の調査では、新婚カップルの7割は賃貸マンション・アパートに居住し、結婚に際して9割が家具を購入している。インテリア用品、雑貨を含めて最も購入の多いものが婚礼タンスという。

しかし、マンションを中心とした現代の住まいにおいては、備え付けのクローゼットが一般化し、また、システムキッチンや内装の洋風化によって、婚礼タンスが不用品として取り扱われることも少なくない。インターネット上には、婚礼タンスをどのように処分するべきかについての議論もまた多く見受けられる^(※3)。

なぜ日本人は、タンスを重要なものと考え、それに固執するのであろうか。日本人は家具に対してどのように考えているのだろうか。

2. 学生の意識の変化

インテリアの授業で家具について話をする導入時に、学生たちに一番重要な家具を何だと思うかとたずねると、タンスという答えが一般的であることが続いた。しかし、この2～3年、学生の回答がタンスに集中する割合が減った。今年の授業において本学一年の受講生128人に対して、家具の中で最も大切なものは何だと思うかとたずねた際の回答は表1のとおりであった。

表1 家具の中で大切だと思うもの（短大生）

N=128

テーブル (机)	タンス	テーブル +いす	ベッド	ソファ	その他の 収納	複数回答	家具以外	不明
44人	28人	8人	17人	4人	5人	5人	9人	8人
34.4%	21.9%	6.3%	13.3%	3.1%	3.9%	3.9%	7.0%	6.3%

表中のその他の収納では主にサイドボード、テレビボードなどのリビング収納が多く、複数回答ではテーブル・いす・たんすや、ベッド・ソファ・テーブルのように3種以上の家具を回答した。近年家具以外の回答が急に増えたため、今回の授業に際しては回答の前に、「家具は生活に必要な道具であり、家電とは区別して考える」旨の補足をしているにもかかわらず、「照明」や「テレビ」「冷蔵庫」を一番大切だとする学生がいた。

テーブル（あるいは机）を一番大切だという学生が最も多く、いすを大切なものとする学生も全員がテーブルとセットで大切なものと考えている。また、2割強の学生は、タンスが最も重要な家具だと考えているようである。以前はタンスが最も重要だと答える学生が圧倒的であったが、近年マンションをはじめ住宅の中にあらかじめクローゼットが建築物と一体化した収納空間として普及する中で、タンスが最重要家具ではなくなってきたこと、そして、家族のだんらんにも必要な家具としてダイニングテーブルが重要視されていること、また、その付属物のようにいすが考えられていることなどがうかがえる。

しかし一方で、タンスが重要性を失うとともに、家具そのものについての関心も薄れており、家具とは何なのかについて全くわからない学生も多く存在するようになってきている。

3. 母親への意識調査

本研究では、学生の意識に多大な影響を与えていると考えられる母親に、家具についての意識調査を行った。今回の調査は、学生を通じて保護者に回答してもらう、間接配票、留め置き自記法、間接回収の形をとっている。配票数は140票、有効回収票は56票、有効回収率は40.0%となった。有効回収票が非常に少ないため、統計的な処理は困難である。

3－1．調査対象の基本属性

短大生の母親であるため、回答者の年齢は45－49歳が最も多く45％を占めている（表2）。家族人数は2人世帯から6人世帯までばらつきはあるものの、平均家族人数は約4人である。また、家族の年収は、表4のように分布しており、短大生を含む家庭として経済面では厳しい世帯も多い。

現在の住宅は一戸建て住宅が最も多く、7割を占め、都市部の短大に通う学生の世帯としては戸建の率がやや高い。また、住宅の所有形態としては、持ち家が84％と最も多く、都心に暮らす家族というよりは、郊外および周辺都市に居住する家族の特性を持っている。

本調査は、結婚時の家具についての意識を調査の一つの目的としているため、回答者がいつごろ結婚したのか、そしてその後住まいを転居した経験があるかどうかについても調べた。図1は、結婚してからの年数であり、一人を除いておおむね20年以上前に結婚していることがわかる。また、図2は現在の住宅の居住年数をたずねたものであるが、5年未満から30年にわたるもので多様である。結婚してからの転居の有無は表7のように転居経験者が約7割と多い。しかし、現在の住宅の平均居住年数は約16年であり比較的長いと考えられる。調査対象者は、昭和の終わりごろに結婚をした夫婦が多く、その時代の特性を知ることができるものと考えられる。

表2 母親の年齢

N=56

40歳未満	40－44歳	45－49歳	50－54歳	55歳以上
0人	17人	25人	14人	0人
0％	30％	45％	25％	0％

表6 住宅形態

N=56

持ち家	賃貸住宅	社宅
47人	8人	1人
84％	14％	2％

表3 家族人数

N=56

2人家族	3人家族	4人家族	5人家族	6人家族
3人	12人	21人	15人	5人
5％	21％	38％	27％	9％

表7 転居経験

N=56

あり	なし	不明
38人	17人	1人
68％	30％	2％

表4 世帯の年収

N=56

300万円未満	300－500万円	500－700万円	700－900万円	900万円以上	不明
3人	17人	20人	8人	6人	2人
5％	30％	36％	14％	11％	4％

表5 住宅形式

N=56

戸建住宅	中高層集合住宅 (6階建て以上)	中層集合住宅 (3～5階建て)	低層集合住宅 (1～2階建て)
40人	9人	5人	2人
71％	16％	9％	4％

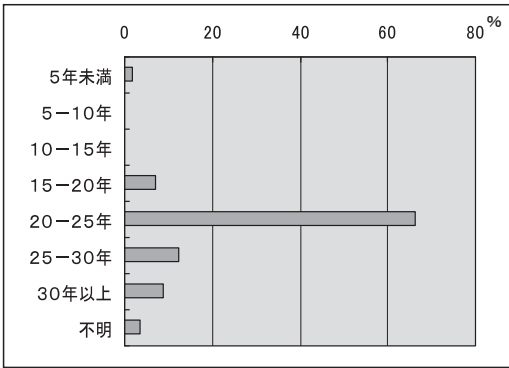


図1 結婚してからの年数 N = 56

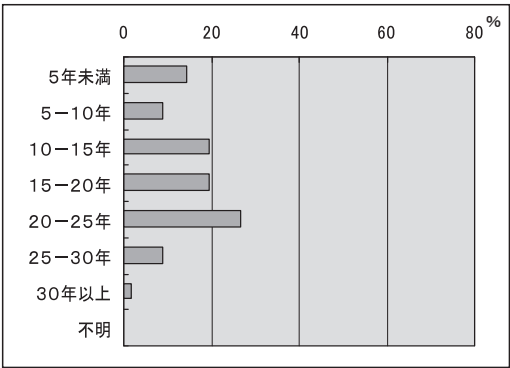


図2 居住年数 N = 56

3-2. 調査対象者の家具についての認識

今回の調査のきっかけは、学生があまりにも家具に対して認知していないことが一因であった。このため、調査対象者である母親に対しても、「家具」とは何かという問いかけを行った。具体的には、次の中で家具に分類されるものはどれかというものであるが、その結果は表8のとおりである。タンスについては100%の人が家具という認識を持っているものの、いす、ドレッサーなどについても、記入漏れのある母親が存在する。折りたたみ式の机であるライティングビューローはあまり知られておらず、半数以上の人々が家具という認識がなかった。またマッサージチェアは、その性格上、家具かどうか分かりにくく、家電製品の中で家具に分類することがうなずけるものである。しかし、「照明」を家具であると考えた人が23%も存在していることが注目される。このことは、家具の購入の際に、近接した売り場で照明を販売していることが多いなど、家具とは何かということを学んで知っているのではなく、実体験に基づく判断をしているためかもしれない。

表8 家具の分類に入と思うもの

N = 56

テレビ	照明	電話	冷蔵庫	エアコン	テーブル	ドレッサー	タンス	ベッド	ソファ	ライティングビューロー	いす	マッサージチェア
4	13	3	5	2	54	51	56	54	55	26	53	11
7 %	23%	5 %	9 %	4 %	96%	91%	100%	96%	98%	46%	95%	20%

次に、母親自身が結婚時にどの家具を重視したのか、そして子どもの結婚時にはどの家具を重視するつもりなのかをたずねたものが図3および図4である。自分の結婚時にはやはりタンスを最も重視した人が多く、次にドレッサー、ベッドの順になっている。調査対象者は、結婚

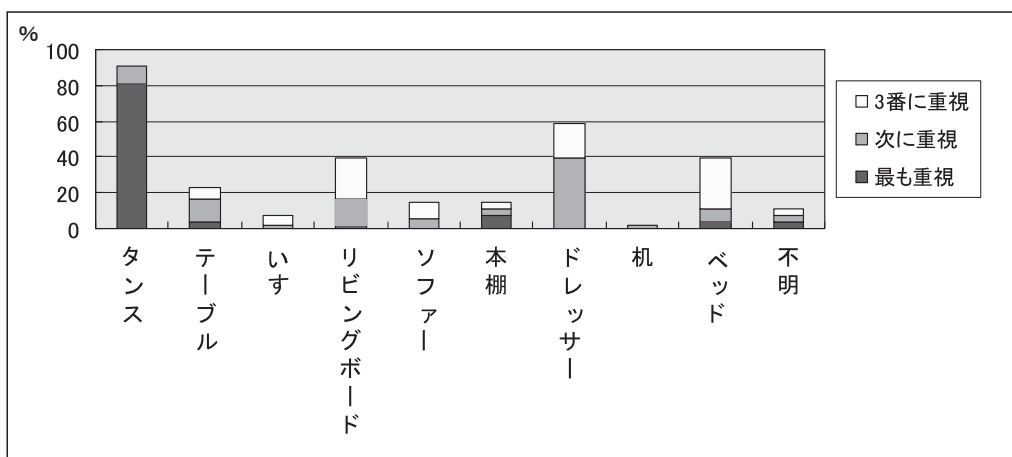


図3 結婚時に重視した家具

N = 56

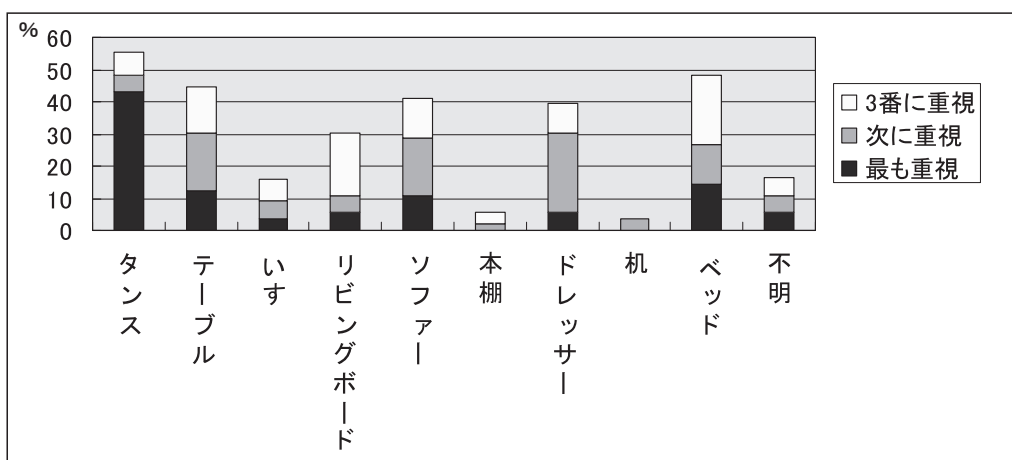


図4 子どもの結婚時に重視するつもりの家具

N = 56

後の年数からもわかるように、昭和60年前後に結婚した人が大半であるが、この頃の女子短大生の家族の生活状況を調べたところ^{(※4)(※5)}、約7割の家庭が洋式のダイニングルームで食事をしており、マンション層も一定数存在していた。このことから、自分自身は結婚までは椅子式のダイニングルームの経験のない者も存在することがわかる。当時の調査では、現在の食事室を肯定する人がほとんどであったが、ダイニングテーブルと椅子でのくつろぎには馴染めない人の存在も多数認められた。また、子ども部屋の洋風化は進んでいたが、夫婦寝室は和室を利用している世帯も多く、タンスがその和室に置かれていることも多かった。当時の生活スタイルからみると、タンスを一番に考えることにさほど違和感はなかったかもしれない。

一方、子どもの結婚時にもタンスを最も重視して考えるという人が多く、一番重視すると答

えた人は半数に近い。自分の結婚時だけでなく、何年後かの子どもの結婚時にも、ベッドやテーブルではなくタンスを重視する傾向がみられる。これは、前述のように現在の住まいでの居住年数が比較的長いこと、またマンションなど集合住宅居住者が少なく7割が戸建住宅に居住していることが関わっていると考えられる。今回は現在の住まいの和室と洋室の比率やクローゼットの有無など、間取りに関わる内容については調べていないが、それらとあわせて考察する必要があると思われる。

3-3. 家具についての意識

家具に関するいくつかの考え方を調査した結果が図5である。「家具のイメージを統一したい」「家具は家のイメージに影響する」「家具は愛着を持って長く使うものだ」の3項目に対する同意率が高い。「家具は見た目よりも使い勝手だ」に対しては、「少し思う」人が大半であるが、「とても思う」人は少なく、見た目のイメージが優先される傾向がうかがえる。家具をインテリアの重要な要素であると漠然と感じ、長く使うものであるという意識も持ちながら、材質や使い勝手以上に、イメージを優先させてしまっている傾向があると感じられた。

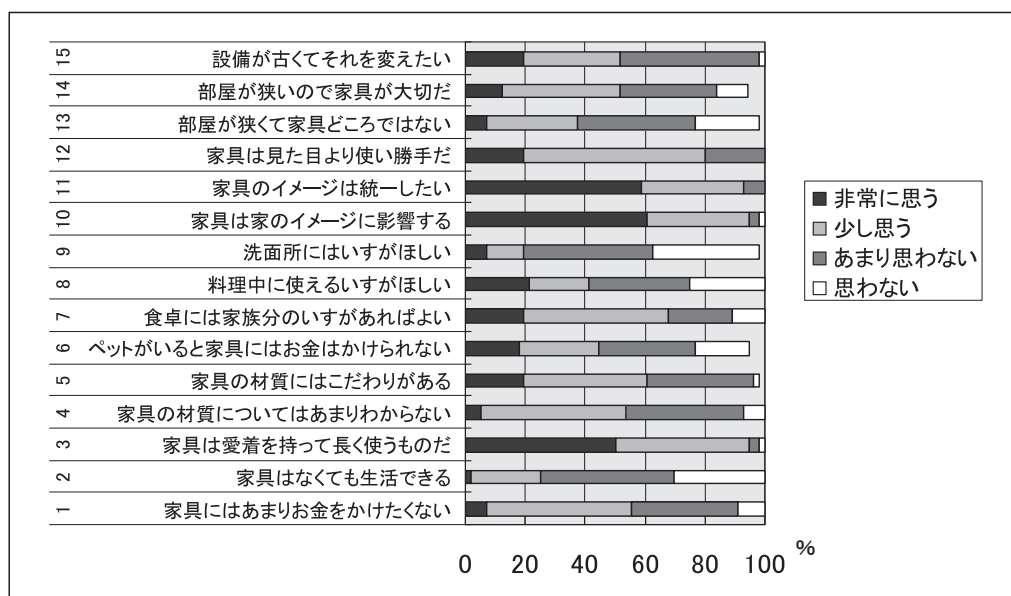


図5 家具についての意識

N=56

4. 家具に関する日本の状況と問題点

日本のインテリアデザインはきわめて特徴的であると指摘されることが多く、またそのように特徴的であり、固有的だとしたならば、それらは＜沓脱くつぬぎの文化＞＜坐る文化＞から生み出されたものが、日本人の感覚の奥深くに生きているからに他ならない、とインテリアデザイナー

の内田繁氏は述べている^(＊6)。それは、日本の風土によるところが大きく、森林の文化、湿潤気候などにより、その住まいが開放的であること、木材を原料とした高床の住まいとして発達してきたことに関わるものである。

もともと西欧型住居には、各室に家具がなければ、室は室としての用途をなさず、食事には食事用の食卓やいすが、寝室には寝台が、そして居間には安楽いすやテーブルが設備されてはじめて室が使用できるのに対し、従来の日本の住居では、西欧のいす、寝台にあたるものはすべて畳によって解決し、また洋服ダンスなどの収納家具に当たるものには、押入れ、天袋、地袋があり、また室の中心でもあり飾り場所となる床の間は、西欧の飾り棚であるサイドボードに当たる^(＊7)。さらに、戦前・戦後の東京では、当時の借家文化を背景に、障子や襖をリヤカーに乗せて引越しをする姿を見かけたという。障子や襖が我が家らしさを表現する道具であった^(＊6)。日本のインテリアは、建築そのものであり、建築や建具が、家具をも兼ね備えていたといえる。

しかし、現在日本の家具やインテリア商品が世界において重要な位置を占めるにいたっていない理由を、島崎信氏は日本人の情緒的な考え方のためだと述べている^(＊8)。「日本の家具の歴史が浅いから」とか「椅子の文化がなかったから」と言われることがあるが、それが正しければ、椅子よりももっと日本で歴史の浅い自動車や家電製品が世界に認められていることと矛盾しているというのである。同氏は、製造しっぱなしではなく世界レベルの基準を作ることと良さをアピールすることの重要性を述べているが、やはり、日本人の多くが、自動車や家電製品に注ぐほどの熱意を家具に対して持っていないことが原因なのではないかと思われる。

第一次世界大戦の前までは、インテリアデザインは“家具と室内装飾”という言葉で言い表されていた^(＊7)。家具は、室の機能を決定する重要なエレメントであると考えられてきた。その家具の中でも、椅子は特に人間の体に直接触れ、体を支えるものであるとの考えから、また、生活の中で最も一般的なものとして、家具の中で最も大切なものとの考え方がインテリア学会では一般的である^{(＊9)(＊10)}。日本において家具の文化が発達してゆく経緯においても、椅子の一般化がその分岐点となっているところからも、家具の中での重要性がうかがえる。

西欧では紀元前3000年のエジプト王朝時代から5000年の歴史をもつ椅子^(＊11)であるが、日本でも意外に古く、古墳時代の6世紀には椅子が伝えられたらしい^(＊12)。中国から仏教とともに椅座の文化が伝来し、その導入時のわずかな間は珍しいものとして興味を持ったが、そうした暮らしには馴染めず、すぐに建築に床を張って「坐式生活」をはじめた。その後もたびたび歴史上に椅子は登場し、室町時代の貴族やハイカラ武士が椅子に坐ってベッドで休息をとっていたことも伝えられている^(＊7)。矢田部英正氏は、日本人は異国のものをいち早く吸収すると、今度はそれを工夫してオリジナルよりももっと優れたものを作り出してしまうような特質を持っているにもかかわらず、それが椅子には当てはまらない。結局これは私たちの生活に馴染まないと、それを放棄してきたのだという。その理由として、椅子やテーブルが、狭い日本家屋の

中でやたらに場所をとるものであり、一つの部屋で食事もし、書もつづり、茶を点てては、寝室としても用いるという日本家屋の合理的な特性に合わないのではないか。また、今までの日本家屋の作り方そのものが、箱を作ってその中の機能を考えるのではなく、まず「坐る」ことから、その畳のモジュールや天井の高さ、障子や襖の開け閉めを考えるという、基準の置かれ方によるのかもしれないと分析している。

家具に対する私たちの意識は、西欧と違うという点では異論がない。また、椅子が非常に重要であると考えられているにもかかわらず、私たちの実生活ではその意識がまだ一般的とはいえない。椅子が広く大衆に普及したのは、昭和30年後半の高度成長期以降のことであるが、その後飛躍的に進歩したというよりは、安い大衆商品が出回っただけとも感じられる。

矢田部氏は、日本の椅子は疲れ、良い椅子がないと指摘し、それが、「腰痛」や「肩こり」を引き起こしていると述べている。学校のいすに対しても、デンマークでは、学校のいすをよくすることが姿勢をよくし、健康な大人へと成長し、医療費の削減にまでつながる、と文部大臣が述べていた例を挙げているが、姿勢が良くなるだけではなく、集中力が高められ、学習効果も増すに違いないと思われる。私たちの健康に深く関わっている家具についての意識がもう少し高められる必要があると痛感する。

一方、筆筒がなぜ日本人にとって最も大切なものとなったのかについては、日本人の服装が和服であったことと関連が深いと考えられる。和服は洗い張りの必要もあり、第二次世界大戦以前まで裁縫教育が続いてきたことからわかるように、わが国では、女性の最も大切な知識が裁縫とされてきた。「衣食住」の中でも「衣」が非常に重要なものと考えられてきたといえる。和服は貴重な財産でもあり、結婚時の持参金のようなものでもあった。また、平面状にきちんと折りたたんで収納する特性を持っていた。岩手県の岩谷堂筆筒によると、「整理筆筒」は和装衣類を収納するものとして日本独自の家具であること、筆筒は江戸時代中期にその起源があるという^(*)13)。他の家具については、必要性を要しない日本家屋においても、貴重な和服の収納に欠かせないという意味では、日本人の生活に欠かせない家具が筆筒であったといえるだろう。

5. 教育上の問題点

今回の調査や授業中の問いかけによって、家具に興味があるか否か以前に、家具とは何かさえ良くわからない人が多いことがわかった。家具が生活の中でどのような役割を果たしているのか、そしてどのように選んで使っていけばよいのか、私たちが知る機会がほとんど用意されていない。学校教育の中で、家具を学ぶ機会はまったくない。小学校、中学校、高等学校の家庭科の中で、家具は何度か指導要領に含まれていた^(*)14)。昭和26年、昭和44年の中学校学習指導要領には家具の選択が項目として表記されているが、改定のたびにそれが姿を消しており、昭和22年試案、昭和31年には小学校の履修内容として、そして、昭和33年には中学校の履修内

容として家具の補修に関する項目が認められるのみである。現行の指導要領にはまったく家具に関する内容は含まれていない^{(※15) (※16) (※17)}。多くの人は家具について学ぶ機会がないまま、家族の中で親から子どもへと知識が伝えられてきたものと思われる。生活が変わり、服装が変わり、住まいが変わった現在の生活の中では、非常に重要となりつつあるのが西洋家具ではないだろうか。高齢社会となり、高齢者にとってはユカ座式生活をはじめとする和風様式が非常にづらいものとなっていることも周知の通りである。前述のように日本にはすわり心地の良いイスがないということであるが、家具とは何かも重要性も知らず、家具に関心も持てない中で、イスが発展してゆくものではない。

家具についての現状と教育の現状を見つめるとき、両者が余りにも離れていることに違和感があった。現状やその原因を探る上での調査は残念ながら回収率が低く、思うように分析することができなかった。しかし、西欧の家具の歴史やその重要性、そして人間工学的な見地から、家具の重要性やイスの重要性を学ぶインテリア教育と、その前提となる知識に余りにも大きな隔たりがあると感じられる。すべての人にもう少し家具についての知識を得る機会を提供し、その関心を高めることが必要なのではないだろうか。そうすることが、日本の家具の発展に寄与し、本当に使い心地の良い家具が創られることになるのだと思われる。使い勝手の良い家具は、家族のコミュニケーションにも役立ち、仕事や勉強の集中にも役立ち、そして私たちの健康にまで影響を与えていくということに気づく必要があると思われる。

<注>

- 1 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%B6%E5%85%B7>（最終アクセス2008/10/1）
- 2 <http://zexy.net/mar/edit/honne/>
結婚準備中のカップルのホンネ通信と題して新居や結婚に際しての家具選びなどの参考にと、2006年から2008年にかけて行われた調査結果から、新居は賃貸マンション・アパートが7割と多く、結婚に際して9割のカップルが家具を購入、その1位が婚礼タンスであると報告している。（最終アクセス2008/9/11）
- 3 <http://www.e-mansion.co.jp/cgi-local/mibbs.cgi?mode=point&fol=manque&tn=0968&rs=41&re=47>
マンション住まいに関する掲示板の中で、婚礼タンスの持込について意見が述べられている。処分が大変であり、処分をしたいと考えている人の多さがうかがえる。（最終アクセス2008/9/11）
- 4 「だんらん空間に関する研究（第一報）」岸本幸臣・中西眞弓、生理人類学会誌、vol.10. no.1、1991
- 5 「だんらん空間に関する研究（第二報）」岸本幸臣・中西眞弓、生理人類学会誌、vol.10. no.1、1991
- 6 『インテリアと日本人』内田繁著、2000.3 晶文社
- 7 『インテリアデザインの実際』狩野雄一著、1969.1 第一版、1990.4 新装版第一版、理工学社
- 8 『「タウトの提案」と「デザイナーの責任」』島崎信 CONFORT 8 月増刊『ジャパニーズチェア-世界に発信・日本の椅子とデザイナー』エーランチ編、2002.8、建築資料研究社
- 9 『インテリアコーディネーターハンドブック販売編』インテリア産業協会、2006.2
- 10 『家具のデザイナー-椅子から学ぶ家具の設計』森谷延周著、2007.7、オーム社
- 11 『「座」の文化論』山折哲夫著、1984、講談社学術文庫

- 12 『椅子と日本人のからだ』 谷田部英正著、2004.1 初版、2007.1 四版、晶文社
- 13 http://iwate.info.co.jp/IwayadoTansu/rekishi_04.html
- 14 「小・中・高校における家庭科指導内容の検討―学習指導要領の変遷―」 新福裕子・守野美佐子・中西眞弓・中川兆子、「生活文化研究」第二十八冊、大阪教育大学家政学研究会、1985
- 15 文部科学省 HP より小学校学習指導要領「第8節 家庭」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122601/009.htm
- 16 文部科学省 HP より中学校学習指導要領「第8節 技術・家庭」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/009.htm
- 17 文部科学省 HP より高等学校学習指導要領「第9節 家庭」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/010.htm